

英語教育の新しい試み

小 谷 泰 造

日本の大学生の数はふえる一方である。今後ともおそらくふえつづけこそすれ、へることはないだろう。それにともなって、大学の教師の数もふえる。とくに需要がますのは、どの大学でも教養課程の必修の課目である外国語、なかでも英語の教師である。授業担当時間数や受講者数をやたらふやすわけにはいかない以上、学生数の増大に応じて教師の頭数をふやすほかないからである。すでに需要が供給を上回って、どこの大学でも英語教官の確保には頭を痛めているらしい。他校へのかけ持ち出講はいまや常識であり、授業時間数一週36時間までは「平然」という笑えぬ笑い話まで聞く。

英語教育の隆盛、文化国家日本として大いに結構な話だが、その中身の方は、はたしていかがであろうか。日本の英語教育ほど時間をかけて、しかも実際に役に立たないものはない、というのが、いまや世間の常識ではないか。

こういうことをいうと、大学の英語教育は単なる実用のための技術教育ではない。語学の修得を通じて西欧的、論理的思考を身につけさせるための教養科目であると、いう反論がかならず出てくる。しかし、そもそも外国語教育というものは、特殊研究者の場合を除けば実用的な技術教育であると考え、かつそれを実行しているのが、まさに西欧的、論理的思考というものではないか。とすると、そういう思考をさまたげている日本の外国語教育なるものは、いったい何を教えているのだろうか。（朝日新聞 標的 英語教育について昭和42年8月26日夕刊）

改めて英語教育の問題の深刻さは、上記の専門紙でない一般読者を対象とする新聞に取りあげられる程、大きく、切実な問題であり、単なる外国語学者、教授者、その他語学に関する全ゆる機関の専門家のみではなく、社会全般の問題として、再考されるべき問題である。古くは英文タイプライターの出現。そして電子計算機の出現が如何に無駄を無くし、数えきれない莫大な利益となって社会に還元されている西欧諸国を考えあわせる時、同様に英語教育の実を上げる事が、個人は勿論、わが国社会全般にとって、如何に有益であるかは個々の例を上げるまでもないだろう。

話す英語か読む英語か

巷間によく聞き話す実用語学か、もしくは原書読破力を育てる読む語学かの論義が盛んに

英語教育の新しい試み

行なわれている。1953年セイロンにて19ヶ国の外国語教師が出席して行なわれたユネスコ・セミナー (UNESCO Seminar) では、外国語の4つの基本的技能教授の順序は、理解・話し方・読み方・書き方であるべきだという意見の一致がみられたし、(UNESCO The Teaching of Modern Language, Paris, 55, P.50) 諸資料のなかに示された論議も、聞き方話し方・読み方・書き方という順序で技能を発展させていくのは、外国語学習にとって「自然」で「正しい」順序とされている。原書の読破力を育成する事もなるほど、重要といえる。しかしわが国の現状をみる限りにおいては、今すこし改めて聞き話す能力をまず育成してからの原書読破力であろう。残念ながら資料を持ちあわせないが現在の英文科学生、英文科入学志望者の総数は、相当な数に達する事は外国人にとって奇異としか写らないだろうし、ましてや英語を話せない英文科学生の存在は理解し難いものではないだろうか？

大学入学試験の重要性

中学、高校、大学の語学教育関係者の会合にて、筆者は、かつて、語学教育は特に中学、高校初期における勉強が如何に大切であるかの説をとねたところ、逆に大学での入学試験がこれら問題の根源をなすものであるとの反論があった。確かに文部省をわずらわせるまでもなく、西欧諸国とは異なった日本の教育の特殊事情がこのような語学教育の貧困を招いている一つの要因であろう。具体的にいえば、大学入試問題に **Hearing Speaking** の試験をさらに加えてほしいとのことであった。**Hearing** はまだしも **Speaking** は多数の受験生をかかえる大学には不可能な事であろう。いづれにおいても大学入試の試験問題が英語教育の指針となり中学、高校にまで影響を与えている限り、内申書を重視しこれを基礎に入学者を決定しようとする方向に進む以前に、大学入試問題に **Hearing** と **Speaking** の問題を加える事が大切であろう。

英語教育の現況

英会話学習者の初期の段階では、しばしば、まず日本語で文章を作り、さらに英語の直訳的な日本語に直し、英作文して初めて英語を話す、即ち、*友人の〇〇氏です。がこれは私の友人〇〇氏です。そして初めて、**Thi is my fried, Mr. 〇〇.**となる。しかしこの様に **Word order** を変換する。大変な再構成の作文を即座にするという苦痛からしばしば途中で放棄する人が多い。そこで考え出されたのが、**Thinking in English**、英語で考えましよう、即ち日本語を忘れましよう。そして幼児にもどって英語を話し初めましよう。である。次に **Hearing** の場合を考えてみよう。*

Two night earlier the Detroit Symphony Orchetre, one of the nation's leading professional orchestras, had played a concert in that same auditorium attracting many of the same people who were attending the Sunday afternoon diamond

aniversary concert of the Battle Creek Symphony

わが国最高の交響楽団の一つであるデトロイト交響楽団は、二日前、バトル・クリーフ交響楽団の60周年記念演奏会にこの日の午後出席した多数の同じ聴衆を集めて同じ会場で既に演奏会を開いていた。(VOA FORUM LECTURES MUSIC)

この様に word order が反対になっていてしかも音声学的にも日本語と違って子音の多い英語を聞き取る習慣をつける事は大変な作業であろう。正確な日本語にする為には、うしろから聞かねばならないという奇妙な事になる。あえて、30年にわたる神戸商大三戸教授の「日米両語の比較研究」を持ち出して個々の例を上げるまでもなくその差異は言語学的にも、その背景となる社会的、文化的にも大きいものといっていだらう。さてその英語をわたしたちはどのように勉強しているのだろうか。

現在の中学、高校、大学の英語教育は統計を上げる迄もなく訳読中心の授業がなされている例えば文法といっても訳読に必要な点を強調しているのである。

「入学試験に発音を重視した問題を出しながら、入学後の授業では、そのようなことは問題にせずに教えているのが現実である。専らテキストを読むことに力を注いでいる。このように見ると、日本の英語教育は首尾一貫していないともいえるし、読むという能力に主力を注いでいるともいえる。外国語を読む能力に第1の重点を置き、少いながらそれに次ぐ書く能力に置くことを、私は一概にまちがっているとは云えないと思うけれど。」(LLA関西支部研究集録神戸外国語大学田島博教授)

かつて米国の大学にて外国人学生の為の英語の授業を取った筆者の経験では日本人学生の英語の聞き話す能力の貧困さは定評のある処であった。例えば東南アジア、アフリカ、中近東諸国を通じ、わずか3・4年で英語を話す様になっている事実は何故なのだろうか。勿論、言語学的にもまたその国民の伝統とか性格にもよるであろうが、考えるにこれらの諸国は植民地時代という歴史を経験し多数の西欧人、実業家を含めて多数の教育者(大多数は宣教師)を受け入れている。これら宣教師はまず語学を教える事を仕事の第一義として来た。しばしば辞書があってそれをたよりに自国語にするのでなく、辞書使用以前に外国語を聞け話すようになっていたのである。その点外国のミッション系の学校の語学能力が高いという事実から上記を肯定出来るだろう。重要な点は明治時代以前に中国文化の移入に熱心だった先人はまず漢文を読む事を勉強の第一義とし、そして日本語そのものの創生に強い影響を持って来た。したがって明治になって言文一致論が沸き立つ程、話し「言葉」からかけ離れた視覚中心の勉強方法が確立されていた。即ち外国の文化移入を急速に進める為には、まず書籍を理解し日本語化してしまう事だった。はたしてその様な視覚中心的即ち訳読中心的勉強方法を英語に適用する事は正しいのだろうか。英語はもともと音標文字であり、あくまで音声を中心として即ち視覚から音声に変え(必ずしも発声しなくとも)ながら読むべき言語ではないだろうか。なるほど象形文字

英語教育の新しい試み

から発達した漢字はあくまで視覚中心のでありその勉強方法は間違っていない。しかし英語にその方法を応用する事は間違っているのではないだろうか。英語は目で見、音声に直し耳で覚えるべきものなのだ。目は通常我々の日常生活においてしばしば多くの刺激を受ける。即ち街路で自動車を避け、身の安全を保つ、混雑では、人にぶつからないように、絶えず視覚を中心とした注意を必要とする。その点耳は勝手つんぼといわれるように必要時を除いて、休息させる事が出来る。そこで当然、抑揚、アクセントが多くそして大切な英語の場合耳の記憶力に頼る事が第一となるのではないだろうか。個々の単語をつい聴覚的に覚えさせず視覚的に覚えさせようとする傾向を我々は持っている。しかし我々が英文を作文していてAという単語とBという単語を使用すべきか判断に困ると辞書に頼り辞書に記載されていない場合、その文を読み音声に直し耳の判断にまかせる事が多いのではないだろうか。

明治維新以後、西洋文明の移入に急であった我々の先人は音声にわずらわせる事をはぶかねばならない程、移入に急であったのである。事実それで充分効果を上げ、今日先進国家の一つとして進んで来た。しかし世界がコミュニケーションならび交通の発達で増々せまくなった今日、読書みきの視覚中心的勉強方法から聞き話す聴覚中心の実用的な勉強の必要にせまられた段階となり、日々その必要性は増加しつつある。我々語学教育関係者はどの様にしてそれに答えて来ただろうか。

LL教育方式

聴覚を中心とした語学教育法即ち聞き話す能力を育てる為、数年前最大の脚光をあびたのはLL教育方式(Language laboratory system)であろう。筆者は過去一年間その必要があってLL設備を持つ各校を調査した。勿論中学を初め高校、大学と相当数の学校が既にこの高価な教育設備を設置していて熱心な教授陣が色々工夫その教育に当たっている。そしてLLA(Language laboratory Association)の支部大会、全国大会等で次々とその成果を発表されておられた。しかしそれ等教育方法は大部分外国の言語学者の翻訳に基づく教育方法の直輸入であり、あくまで日本語という難解な言語を有する我々が外国語を学ぶための実践理論、方法でなく英語国民が仏語、独語を学ぶ際の効果的な方法ではないのだろうかという疑念が常に筆者の脳裡から離れなかったのである。そこで、LL教育には種々方法があるが、基本的には次のような方法に代表される、その方法を紹介しよう。

まず Hearing の練習として

1. 個々の音を聞き分ける方法(Aural perception) まずテープに right, light を録音聞き分けさせる方法。
2. 短文の意味を聞き分けさせる方法(Aural comprehension) 1つの短文を読み上げ、それに相当する内容でしかも異なる表現の文を1つ含む3つの文をプリントしておいてその中から該当するものを番号で選ばせる。

3. まとまりのある話しの大意を聞きとらせる方法、解答は True-False で答えさせたり、内容について幾つか質問し正答を含む 3 つの答えをプリントしておき選択させる。

次に **Speaking** の練習として

1. 個々の音の訓練

l-r の区別, th 音, f, v, 日本人の不なれな音を出させる **Tangling expressions** 等を反覆練習させる。

2. **rhythm, intonation** の訓練

段階的に **pattern** を設定してその **pattern** のもとに **words** や **phrase, short sentence** の例題を上げ **repest** させる。

3. **mimicry-memorization drill**

教材テープに **pause** を入れておき **model** の声を口まねして行く。

上記の代表的な訓練法はさらにまとめると、**hearing** の場合、教材テープを聞かせ、理解させる。**speaking** の場合、必ず **pause** を置き、その口まねをすると云う非常に消極的な教授法といえるだろう。即ち **stimulus** に対し、**percive response** であり決して **productive responses** ではないといえるだろう。上記の方法は、全米各大学で用いられているごく普通の方法である確かに英語国民がその **word order** を同じとする仏語、独語を学ぶ場合、個々の発音、簡単な文法的事柄にさえ注意すれば効果が上がると充分予想される方法である。全米各大学にて行なわれている外国人学生の為の英語の授業で日本人を対象として、上記の方法がとられたとしても充分効果あるものといえよう。何故ならば、日本人学生は日本語から隔絶されるという異常な条件下にあり、逆にその授業を補佐する意味での英語に日常接していて絶えず勉学の機会を与えられているわけである。これをわずか週一回の授業に与え、しかも日常日本語ばかりに接して生活している生徒にとって余り効果は期待出来ないものだろう。語学の勉学は常に毎日のささやかな積上げである。即ち第 1 週の授業の結果 10 の力に達した者が第 2 週の授業前は 6 ~ 7 に下り、授業時間の 3 分の 1 は 6 ~ 7 の力を 10 にもどす為につかわれ、残り 3 分の 2 の授業で 15 の力まで到達させるのである。要するは休めば現状維持でゆく能力がどんどん減少して行くのである。筆者の調査の及ぶ限り、救世主である LL 教育方式も英語国民の仏語の勉学ほど効果を上げていないのである。

新しい実験とその前提

日本の英語教育ひいては LL 教育を効果あらしめるための何らかの方法はないだろうか。即ち **percive** なものから **productive** な LL 教育法に変える事が出来ないだろうか。大阪外国語大学羽田三郎教授の助言のもとに、関西の各大学、阪大、大阪外語大、大阪女子大、関西学院大、同志社大、神戸大、神戸女学院大、関西大、神戸外語大等の有志学生を対象に、筆者が行なって来た実験を紹介し識者の批判をいただきたい。その前に、重要な前提を紹介しよう。

英語教育の新しい試み

偉い外国語学者の高遠な学説方法も有難いが日本人なりの考作工夫にもかなりの実用価値がある事を悟ってそれに着目、新しい研究のエネルギーを惜しなく没入することになるならば、日本語を枢軸とした斬新にして実効ある日本人の外国語向け日本語学が樹立されるのではあるまいか？それによってわが国外国語学習も「ことば」として本筋の道に沿うやり方が可能になって、現在世間を騒がせている「役に立つ英語」という声も自然に静まってゆくのではあるまいか。「外国語に対照された日本語の実態研究」こそ刻下の急務であり、その実質成果こそ日本人の外国語への道を招く原動力、行く手を照す久遠の光となるものであろう

(神戸商業大学 三戸 雄一 教授)

既述の如く日英両語の差異を知る事こそ英語を修得する第一歩となるものである。さらに三戸教授の示唆にある如く、日本人に依る日英両語の比較研究が有効に行なわれなければならない。国語としての日本語研究でなく、国語を国際的立場に置いての研究が必要である。日英両語の差異を強調して二つの言語を比較対称しながら教授すべきであろう。例えば英語国民が仏語、独語を学ぶ場合、その英語の知識を利用し、その上に新しい言語を学んでいる。しかるに我国では既出の如く、日本語を忘れ、幼児の時代に立ち返って初めて英語を学ぶ、要するに日本語の知識（しばしば中学、高校で学んだ英語文法が障害にもなり得るが）が一つの障害にもなっているのではないだろうか。

A. FOLLOW UP

第1の方法は、一つのまとまった文章を **native speaker** に録音を依頼する。市販のテープでもよし、それを三段階にわけて録音する。(1)ゆっくりしたスピード。(2)普通のスピード。(3)早いスピード。このテープを仮りに(1)の段階で10分間あったとしよう。その10分間のテープを、まずマスターテープとして流し生徒に同時に **follow** させる。声を出る限り大きく（口を大きく開けさせる必要あり）あげて発声させる。実験では約3秒位遅れて **follow** 出来るのが普通である。勿論、**r, f, L, V, Th** 等日本人にいが手の発音は充分注意を与えておく、最初割合平易な発音の持つ単語からなる文章を用いる。勿論2音節、3音節もある単語は第1回目ではついて行けなくて **skip** する場合が多々ある。(1)のテープをマスターすると(2)(3)と段階を進める。これを総計5、6時間繰返し行うのである。この文章は生徒にはプリントして渡しはいけない、あくまで耳から覚えさせる事である。

この **follow up** の効果として考えられるのは次の点である。まず初期の段階では、生徒は文章の意味も何も判らずただ懸命に口を動かし **follow** するだけである。即ち個々の単語の発音に懸命の段階といえるだろう。ほぼ3秒（聞き、口の運動神経に指令を与える間）遅れて **follow** して行ける様になるという事は、マスターテープの **native speaker** と同じ口の動きを行っているわけである。個々の単語の発音、口唇、舌の位置等は前もって説明しておく、これが個々の単語の発音訂正の為の第一段階である。

英語教育の新しい試み

第2段階として、文章の抑揚、強勢、休止等を模倣するようになる。これが出来ない事には息の入る間が無くとも follow 出来ない。第3段階として、文章全体の flow 流れをつかみ、余裕を持って個々の発音、文章の抑揚、強勢、休止等に注意を払うのである。第4段階として文章の意味を理解しようとする作用が働き、知らない単語をメモし辞書をひく様になり全体の意味を理解する。第5段階、完全に意味をつかみ、**speaker** と同じ様に自分から話しかける様な読み方となって初めて完成する。ここでこの最終段階として重要なのは、基本的には主語+動詞+目的の英語の発想を持つ様になる事であろう。従来の文章を何個所も区切り **pause** を置き模倣させるという方法では、LL教室内でのみマスターした **r, th, f, v** 等の発音もその場、その場で忘れる事が多い。**Short Sentence** の繰返しもあくまで日本語のくせの残った自己流が多くなる。しかしこの方法は全体の文章の流れの中から自然につかんでいく、しかも相当な神経の集中を必要とする厳しい訓練から生みだされる強引な方法である。さらに出来る限り **native speaker** の口唇の動きに近づけ、又近づかない限り3秒差では follow 出来ないのである。そこで再考を求めたいのは同志社大小田幸信教授の指摘する次の点である。従来の記読中心の授業で見逃している重要な点である。「訳読すなわら **Reading** は、発音が音声とならなくても、頭の中で聴覚、調音の作用が行れており、文字→音→意味の段階を経ておりながら、テストの段階で日本語の文章に直された、訳からその作用に対する評価はなされていない。これは本当の意味での訳読 — **Reading** ではなく、**Reading** には文字記号で表わせない重要な強勢、休止、音調を補って読むべきであり、文字は意味即ち社会的、文化的な背景を示す記号である。」この方法では音→意味の段階を強調し単なる **oral reading** から **expressive reading** となり **percive** から **productive reading** となるのではないだろうか、従来のLL教育で行われている **Short Sentence** を取り上げ何度も繰返し練習する。例えば **How are you?** いくつかの抑揚、強勢がこの一文の中に置かれるが、これ等は上記の10分間の文章の中に含まれている抑揚、強勢、リズム等の集約されたものであり、その集約から学ぶより一文を全体としてつかみ後にこれ等の集約された **short sentence** の抑揚、強勢等を学ぶ方がいいのではないだろうか。例えば母音の前の **the** の発音も視覚でとらえ発声する際、つい見逃がす生徒が多い、**native speaker** が話している場合、次の母音を発声しようとするのがごく自然に **the** の発音が変わるのである。母音の前の **the** は正しい発音するのがごく自然でなめらかである。この様なひとつの自然な文章の流れを上記の方法でつかめるのである。

B. 英語から日本語へ

次の段階として、授業前すでに日英両語の対訳付のプリントを渡し充分予習させて置き、その英文をやはりテープに録音し、それを同時に日本語に訳読させていく。ここで初めて日英両語の比較対照が各生徒個人々々の頭脳の中で同時になされる。聞き→理解する作業と作文し→話す作業は通常の生活では全然別個の作業である。だから非常に過酷な頭脳の活動を強制する

わけである。簡単に云えば、同時通訳の方法である。次の様なプリントを生徒に渡したの仮定しよう。

Approximately 200 miles to the south of Louisville is the city of Nashville, Tennessee, of nearly 200,000 population. Nashville calls itself the "Athens of the South," and is very proud of the fact that it possesses a full-sized, exact replica of the Greek Partheuon, several colleges and universities, and a geod semi-professional orchestra, as well as many other arts organizatious.

*ルイスビルの南約 200 マイルに約20万の人口をもつテネシー州のナッシュビルの町があります。ナッシュビルは南部のアテネと自称し、ギリシャのパルテノンの実寸大の正確な複製を持ち、5, 6の大学、立派なセミプロのオーケストラ、同様に多くの芸術団体を持っている事を非常なほこりとしています。、

これをテープで聞き日本語訳する場合を想定しよう。即ち、

*約 200 マイル南ヘルイズビルを離れるとナッシュビルの町がテネシー州内にあり、約20万の人口を持っております。その町は南部のアテネと自称し、次の事を非常なほこりとしています即ち、現寸大のギリシャのパルテノンの複製、5つ6つの大学、立派なオーケストラ、同様にその他芸術団体等であります。、

教室にて hearing のテストを試みる場合生徒はよく「何となく判った。」と答える。そこでよく考えなければならないのは、hearing の場合何となく判ったでは不充分であり、あくまで正確に判らなければならない。日英両語には文法的にも、またその背景となる論理的構造にも余りにも大きな差異が存在するので、聞き→理解し→日本語に再構成して初めて正確に意味を把握したものとなる。初期の何となく判ったという段階では明らかに word order や微妙な表現を置き換えずに、英語を英語としてしか理解し得てない段階にあるわけである。英→仏の場合聞き→理解→仏語訳の段階において、聞き→理解と理解→仏語訳の段階は、順が似ているので、ほとんどイコールになり、理解できる事はすぐさま仏語に直すことになるわけです。英→日の場合、聞き→理解する段階が難しくさらに同様に理解、日本語の段階も難しいわけです。またその点が非常に重要な点でもある。日本語訳をして初めて hearing の正確度が高まるわけであります。

S + V + O

I want to mention this.

① ② ③

という文の場合「私はこれを指摘したので。」と訳せば①③②となり、日本語としては自然な文章である。しかし書く場合は別として、「私が指摘したいのはこれです。」①②③と日英両語を対応させると耳で聞く場合語調を極端に変えない限り、その意味に変わりはない。即ち日本語を英語の論理的な構造に変えて理解する様にするわけである。最近よく云われている英語を出来る限り前から訳す方法、即ちその方が英語の hearing を強くするにも又その論理的

構造の理解にも最良であるという論を典型的に適応した形である。この利点について詳述をさけるとして、実際上記の方法を行う場合、しばしば、問題になるのは、聞き→理解→日本語化→話す段階においてどうしても日本語で話すのが遅れていく事である。上記の苛酷な頭脳の活動過程プラス日本語の音節が多い事である。“I want to mention this.”は5音節、その和訳は「ミワタクシガシテキシタイノハコレデス」の17音節にもなるからである。第2の問題は聞きながら話すという作業を同時に行うため話している際に聞えず、聞いている際に話せずという事である。第1の問題は、目的が同時通訳の育成でなくむしろ語学教育だという点から是認出来るものであり、又同時通訳者の場合も早口である事も条件のひとつであるが、むしろ如何に適切な言葉を選択し信頼感を持たせ発言者の感情に近づくかの点にある事から考えて当然であろう。その点時間的なズレよりも何行も忘れず頭に蓄積しチャンスを見て発言者のスピードに追いつくかの点にある。その点英語の場合しばしばくどい表現で繰返しが多々ある。例えば

Grim Outlook

Both sides are also divided over the legal interpretation of 17th parallel. The U. S. considers the South therefore, that North Vietnam's infiltration into South Vietnam is an act of aggression.

North Vietnam believe that the North and South are part and parcel of Vietnam. It says that Vietnam is one and reasons that the 17th parallel is merely a temporary truce line. Therefore, it labels the U.S. the aggressor.

Thus there is no meeting of minds between the U.S. and North Vietnam. Indeed the outlook for Vietnam peace is grim.

険しい前途

17度線の法的解釈も喰い違う

アメリカは南北それぞれ別の独立国とみる。

故に北の南援は侵入だと主張する。

北ベトナムは北も南もベトナムには変りない。

ベトナムは一つだ、17度線は仮りの停戦線にすぎない。

侵入者はアメリカのみだ — と主張する。

全くの平行線である。和平の前途は険しい。(Student Times, 今週の焦点)

Both sides are also divided over は

喰い違う。であり

Thus there is no meeting of minds between the U.S. and North Vietnam.

全くの平行線である。の一言ですませる。

第2の点の聞きながら話す事でしばしば、自分の声がヘッドホーンのすき間から入り、マス

英語教育の新しい試み

ターテープの音と自分の声がまぜり合い、つい聞いてから話す事の繰返しとなりがちである。それは週一回約一ヶ月の訓練でマスターテープの音にのみ集中力がむき自分の声が聞えなくなる。しかししばしば時間的に追いつけない焦燥感から、その段階にいたる迄に放棄する者が多いので教育者は相当な熱意と統卒力で指導せねばならない。教育者は常に生徒をモニターし、いい場合は他の生徒に必ず聞かせる必要がある。個人々々言葉にくせがある。≡即ち≡、≡と云いますのは、≡とか各人が他人に学び、最良の言葉を常にお互いにゆづり合う事が必要である。

次に始めて出会う文章を流すこれは前のプリントより少し易しいが早口で録音したのがいいそしてそれを前記の方法で繰返させる。これ等英一日の訓練はテープスピードが早過ぎるとか判らないからだまってしまう事なく常に他生徒の前で発表させ、何とか日本語にこなしてしまおうという心構えを持たせる事も必要である。

C. 日本語から英語へ

次に日一英を試みさせる。これは教材の選択に非常な注意を必要とする。日本文のしばしば論旨があいまいで肯否がはっきりしないものはなるべく避ける事である。専門的なテクニックの説明を避け簡単にその重要な点を上げておこう。これはなるべく話された文章即ちスピーチの原稿であるとか、平易な物語から入って行く方が簡単である。しばしばこの訓練の初歩の者は日一英の方が簡単とするが、むしろ難しく重点を置くべきはこの日一英である。平易な単語をならべるのでなく、出来る限り感情を盛り、抑揚、強調、全体の流れ、リズム等に注意し英語らしい表現が必要である。この日一英の方法の利点のひとつに次の事があげられる。英会話を少し話せる様になると、その段階に止まって進歩せず簡単な受け答えしか出来ない事である。これはむしろ語学能力というより、日本人が人前で堂々と一つの論旨を説明、発表する訓練に欠けている点もあるが(米国では小学校から大学まで Speech の授業があり常に訓練している)通常カクテル・イングリッシュと呼ばれるものである。これを無くし格調高い英語を何十分も話せるようになる事である。紙数の都合上より深い分析が無く単なるLL教育法の紹介に終わったが。最後にLL機械装置にふれてこの一文を終ります。このLL装置もどの学校も完全なものがなく、それぞれ利点と欠点をかね合せていたが最少限、次の4つに注意して戴きたい、その第1に、生徒のブースの録音ヴォリュームを固定する事、第2に生徒相互間の通話可能な事、第3に、1人1分づつ聞いても50人平均として50分もかかるので一度に視覚的に生徒をつかめる様相互通話のスイッチの上にVUメーターを設置する事、第4にマスターテープレコーダーのスピードを変え自由にマスターテープを早口に話させたり遅く話させたりする事、上記は一部メーカーでも開発中ではあるが、上記メーターは清風南海学園にあり最後のマスターテープのスピードを変える設備は明治学院大には装置されている。

これは一部昭和四十二年六月二十三日阪大教養部にて発表したものと一部重複しております。